



こーひーぶれいく

暗渠巡り

勝部 孝則

Katsube Takanori

散歩が好きで、川沿いの遊歩道等をよく歩きます。自宅から10分ほどの桃園川緑道も、お気に入りの散歩コースです。ただしここは、緑道だけで川はありません。桃園川は蓋で覆われ、その上に緑道が整備されているのです。数年前まで、緑道の下に隠された川のことなど気に掛けていませんでした。きっかけは、郷土博物館で目にした1枚の写真です。昭和初期に撮影されたもので、田園地帯を流れる小川で、子供たちが楽しそうに遊んでいました。住宅や舗装道路に覆われた現在の状況からはにわかに想像できませんが、昭和初期まで、私が生まれ育った山陰の農村とかわらない田園風景が、桃園川一帯に広がっていたようです。そう思って観察すると、桃園川緑道周辺には、そこに川があったことを示す痕跡がいろいろあります。言うまでもありませんが、水は下へ下へと流れ、周囲より低い位置に川を作ります。桃園川緑道を横切る道路はすべて、緑道に向かって下っており、ここが谷の底であることを教えてくれます。緑道脇では、橋の親柱を数多く見かけます。残念ながら殆どは、緑道を整備する際に設置された複製品のようなのです。しかしながら、「宮園橋・昭和7年5月完成」と記された石造りの立派な親柱と欄干が遺されている場所もあります。更に緑道周辺には、コンクリートブロックの蓋がそのまま露出した、桃園川支流の跡が幾筋もあります。これらの川の痕跡を頼りに、かつての桃園川とその周囲に広がる田園を想像すると、いつもの散歩道が全く違って見えてきます。ちょっとしたタイムトリップです。

桃園川のように蓋をされた川を暗渠と言います。田園を流れる清流が、ある日突然、蓋で塞がれるわけではありません。都市化にともなって汚水が流入してドブ川となり、衛生面や美観等の問題から暗渠化されます。蓋の構造にもよりますが、大きな荷重



写真 放医研西側の暗渠

写真右下から左上へと通じる歩道が暗渠化された川。川を渡る橋が暗渠化後もそのまま残され、歩道の通行を妨げている

には耐えられないため、自動車の侵入は規制され、歩道として利用されることがほとんどです。桃園川支流のようにコンクリートブロックで蓋をしただけのもの、蓋の上にアスファルト等で舗装をしたもの、桃園川のように緑道や公園として整備されたもの、形態は様々です。アスファルトで舗装されると車道との区別が付きにくいですが、車止め等で車道と区切られています。車道に比べて妙に幅の広い歩道の下には、暗渠がある可能性が高いです。

桃園川を観察した目で見渡すと、身近なところに、他にも沢山の暗渠が見つかります。筆者が勤務する放射線医学総合研究所（放医研）の北側から西側へ、敷地を囲むように谷があります。現在、水の流れを確認することはできませんが、ここに谷川があったようです。谷の上流部分、放医研北側には、かつての渓谷を偲ばせる小園公園が整備されています。残念ながら川は再現されていません。小園公園を抜けたあと、暗渠は住宅の下を通過して、JR 稲毛駅から放医研へと通じる道路を横断し、南下します。そして、「放医研西側」信号機の辺りから、車道に隣接する歩道としてその姿を現します。上の写真は、この歩道が暗渠であることを示す決定的証拠、歩道を跨ぐ橋です。暗渠の蓋では車の荷重に耐えられないため、暗渠化後も残されたものと思われます。このような橋が300mほどの間になんと6つも確認できます。

アイソトープ協会最寄りのJR 駒込駅北側には、大きな谷があります。また、駒込駅南側の六義園には、かつて千川上水の水が引かれていました。千川上水は自然の川ではありませんが、現在は暗渠としても有名です。近いうちに、アイソトープ協会周辺で、川の痕跡を頼りにタイムトリップするつもりです。（量子科学技術研究開発機構 放射線医学総合研究所）